П・С・カブィートフ；В・А・コズローフ；Б・Г・リトヴァーク著

『ロシアの農民
——精神的解放の諸段階——』

П. С. Кабытов ; В. А. Козлов ; Б. Г. Литвак, *Русское крестьянство : Этапы духовного освобождения*, モスクワ, Мысль, 1988年, 240ページ

鈴木義一

I

本書は，ペレストロイカの産物である。そこでまず，ペレストロイカのもとでのソ連の歴史学の現状に簡単に触れておかなければならない。ソ連史をめぐる今日の議論は，改革派対保守派といった図式では分類できない複雑な相互関係にある。そこには，注目すべき論点が数々ある。最近では，十月革命の正当性やレーニンそのものが正面から批判的に議論されるようになり，もはや正統的解釈も不可侵の対象もなくなっている一方で，民族主義や反ユダヤ主義の論調が出てくるなど，混沌とした状況になってきている。

最近のこうした活発な議論のなかで，本書に関連して以下の論点を指摘できる。第1に，分析の対象と方法にかんして，たとえば「政治文化」や「経済文化」といった概念が注目されている。この背景には，西側のさまざまな学問潮流の成果を受容していこうとする，積極的な態度がある。第2に，スターリン主義や1930年代に確立した行政・命令システムの根源にかんして，激しい論争が展開されている。ここで問題となるのは，スターリン個人や権力装置だけではなく，たとえばロシア社会の伝統やマルクス・レーニン主義の特質といったような，より広い文脈で把握すべき問題である。第3に，社会主義を社会民主主義も含めたより広い概念として捉え，ソ連型社会主義を社会主義の一類型と考えて，その形成過程の問題を明らかにし，新たな社会主義的な理想を創り出そうという態度がみられる(注1)。

こうした角度からみて，本書は以下の点で従来のソ連における研究の枠組を越える新しさを持っている。第1に，農民の心理や行動様式を主要な対象とした社会史だという点である。第2に，ロシア農民の意識と行動にかんして，革命前と，革命から農業集団化にいたる時期との間の継続性を重視していることである。第3に，1930年代に達成された体制を「初期社会主義」(ранный социализм)と規定し，社会主義の歪曲されたモデルとして捉える。さらに内容に目を向けるならば，農奴解放，革命，集団化という激動の時代を生きたロシアの農民が，その過程で何を考え，何を求め，何を失ったのかが，本書全体で詳細に示されている。

II

本書の構成と内容について，その概略を述べておく。本書は3人の著者の共著であるが，第1章をリトヴァーク，第2章をカブィートフ，第3章以降をコズローフが担当している。

序章では，本書の課題が，「一般の」農民の精神的発展の過程という新しい角度からロシア農村史を分析することにあり，その際，農民の社会経済的本性の二面性(двойственность)，すなわち勤労者であるとともに所有者でもあるという農民が持つ独特な社会心理の型が，全体の叙述のキー概念であることが述べられる。

第1章では，プガチョフの反乱から第1次ロシア革命前夜までを対象とし，農民の社会的・政治的覚醒の過程が明らかにされる。ロシアの農民運動の「土地と自由」(земля и воля)というスローガン，そしてツァーリ信仰と伝統的秩序への志向性が，この時期の一貫した特徴であるとしつつ，著者はその内容が農奴解放をはさんで重要な変化を遂げたとする。スローガンの内容は土地獲得の闘争へと比重を移していく。共同体の外部世界との関係の強まりと，農民運動の組織性の向上，脱宗教化の過程も進行する。そしてこれらは，農民の共有する幻想の克服と，新たな幻想の再生産のなかで進行したとされる。

第2章は，1905年革命前後から17年革命前夜までに農民が経験した「政治教育」の諸段階を扱っている。20世紀初頭の農村への資本主義の浸透，日露戦争の敗北と第1次ロシア革命，ストルイピン改革と第1次大戦を経て農民運動は，いまだ伝統的意識や行動を随所に残しつつも，質的な変化を遂げたとする。それは，階級的自覚の向上，運動の組織性と大衆性，ツァーリ信仰の衰退と専制権力との対決，戦闘性の向上である。また，共同体の解体を目指したストルイピン改革が，逆に共同体の機能を強化した点も指摘される。

第3章は，二月革命と十月革命の間の時期を対象としている。ツァーリ体制の打倒は，人格に対する外的規制を取り払い，何よりもまず解放的気分を生み出した。農民の理想は，「自由な土地の上での自由な主人」という概念であったという。この農民の意識には矛盾と葛藤があり，民主主義を求める要求，革命のエネルギー，個性の発達として現われる一方で，社会的変化への当惑，無秩序や無関心，閉鎖性として現われる面もあった。著者は，農民は実体験を通じてボリシェヴィキの路線に接近していったが，その際彼らはボリシェヴィキのスローガンを自分流に解釈して受容したこと，「自由な土地の上での自由な主人」という理念は革命後も引き継がれていったことを指摘する。

第4章は，十月革命から「戦時共産主義」の時期までを対象とする。まず初めに，生産手段の私有制の廃止，生活条件の改善を背景に，農民の顕著な精神的発展がみられたが，同時に無知，偏見，政治的後進性も残されていたとする。次に，農民の意識の「二面的性格」を取り上げ，食糧徴発隊と割当徴発制に対する農民の不満と敵対を，「小所有者の個人主義」という角度から説明する。続いて当時の集団経営を分析し，最後に，農村において形成された新しい精神的態度を持った階層を取り上げる。彼らは，階級的自覚を持ち，新しい価値を理解した先進的な活動家で，その形成母体は，貧農委員会，村ソヴィエト，赤軍，都市からの帰農者，などであった。

「古さのなかの新しさと，新しさのなかの古さ」と，題された第5章では，ネップ期を扱っている。最初に，ネップへの移行による農民のソヴィエト権力への信頼の回復，私的所有者としての利害の復活・強化とともに農民が政治的に活性化したことと農民支配の「戦時共産主義的」な命令的方法との矛盾，党の「農村に面を向ける」路線への転換と農民の積極的な参加の獲得の過程を述べる。次に，農村のさまざまな社会層の分析が続き，富農・中農・貧農相互の社会関係が詳しく検討される。続いて，農村で多数を占める個人農の意識と，社会主義的理念との相互作用を分析する。ソヴィエト国家の働きかけの結果，農民の間で新しい社会性と心理的傾向が生まれるが，農民の存在と意識の二面性は根強く，それが集団経営の建設の障害として機能したとする。さらにこの章では，脱宗教化の過程，文盲の克服と教育水準の向上の運動について述べられている。

第6章は，「コルホーズ員」と題し，全面的集団化の時期の農民と農村活動家の心理と行動を問題にする。コルホーズの組織者にとって，社会主義の理想とはきわめて曖昧なものであり，コルホーズの労働組織の模範となりうる経営もなかった。また一般の農民がコルホーズを受け入れる客観的・心理的前提を欠いた段階で集団化が強制と暴力によって性急に追求されたために生まれた否定的な現象を著者はまず指摘する。続いてコルホーズでの農民の生活の分析に移り，消費原則による分配が生まれる背景と，それを克服するために導入された労働に基づく分配の原理を分析する。次に，こうしたコルホーズ建設の過程で新たに農村に登場した，突撃作業員，スタハーノフ員の社会的性格を取り上げる。

Ⅲ

以下，最初に指摘しておいた点について多少詳しく検討してみるが，本書評ではおもにペレストロイカの思想状況との関連に関心を寄せており，ロシア農民の研究史上の個々の論点に即して本書を位置づけるという点では不十分なものになっている。したがって，以下の記述と本書全体の叙述のバランスとは一定のずれがあることをあらかじめ断わっておく。

最初に，本書の研究対象と研究方法に注目してみよう。著者自身，序章で述べているように，人間の内的世界，意識や精神といった問題は，従来のソ連の歴史学では正当な評価を与えられておらず，その原因は資料上の制約ではなく方法論的問題にあった。これに対して本書は，分析の対象に農民の意識や社会心理を取り上げ，それを農民の行動の重要なファクターとする。資料としては農民の請願，要望書，村会の決定，手紙，新聞への投書，発言，回想，さらに民俗学者をはじめとする同時代人の観察，アンケート調査結果などを用いている。この点で本書は，西側でのロシア農村の社会関係や権力関係についての実証的研究の成果や社会史のグループの研究と肩を並べることになり，さらに「文化的アプローチ」と共有する問題ももっている。

たとえば本書では，ツァーリ信仰，「自由な土地の上での自由な主人」という理想，土地は誰のものでもなく神のものであり自らの労働で耕すものが利用権を持つという土地所有観と勤労観，農民的な公正と平等の概念を析出し，これらが農村の社会・経済的変化の影響を受けつつも農民に受け継がれてゆき，その思考と行動を規制し，方向づけたことを明らかにする。したがって，反地主闘争が皇帝への請願という形を取ったこと，ツァーリ政府の法令が農民流に解釈されて広まったこと，地主と区画地農民に対する攻撃が共同体を基礎に展開した事実

などが説得的に説明されるし，割当徴発と食糧徴発隊に対する抵抗も，都市と農村の矛盾といった漠然とした規定や価値の移転のような経済的説明ではなく，農民の自由と公正の概念とソヴィエト権力のそれとの矛盾という角度から説明している。また，初期のコルホーズの多くがコムーナの形態を選び，必要に応じた分配という「共産主義の原理」を直ちに追求しようとしたという事実についても，権力の側の先走りや「跳躍」を述べるだけでなく，農民の伝統的な平等主義の概念とこうした現象との関係を指摘する。すなわち，農民が理解して受け入れた社会主義とは何よりも家族を食わせるだけのものを保障する体制であり，分配と消費の平等であったために，コルホーズは働き手の数ではなく口数に応じた分配という形を取り，消費的性格を持ったという。

こうした研究の成果は，革命と集団化のなかでロシア農村が経験した過程に対する理解を深めるだけでなく，概念や用語をより明確にすることを通じて，比較史の材料を提供することにもなる。また，本書は農民の意識や心理の変容過程，新しい理念や社会認識の形成を分析する際に，資本主義の浸透や階級対立の先鋭化とともに，出稼ぎや農村への都市住民の流入，軍隊への動員などの社会的流動性の高まりが及ぼした影響を重視している。この過程で農村に新しい社会層ができあがり，彼らは貧農委員会，郷・村ソヴィエトなどの活動家としてソヴィエト政権を支持し，突撃運動やスタハーノフ運動を担ったのであった。彼らの教育・文化水準は高くなく，社会主義の理解も不十分であったが，ソヴィエト政権への信頼は厚く，熱狂と義務感に支えられていた。多くは若者であった。これらの議論はアメリカの社会史のグループのソ連研究の成果と重なる部分が大きい(注2)。

以上述べてきたような方法と内容の新しさは，本書の中に残されている従来の正統的な時期区分や評価の枠組との間に，いくつかの点で矛盾を生むことになる。たとえば，ボリシェヴィキの農業政策の評価，貧農委員会や食糧徴発隊の役割と活動にかんする評価，ネップへの移行過程などは，全体として従来の枠組に従っている。また，ナロードニキやエスエル党，ネオ・ナロードニキらの活動とそれが農民に与えた影響についても，もっと検討されるべき問題を残している。ちなみに，昨年『歴史の諸問題』に発表されたB・カバーノフの農村革命にかんする論文は，農村の革命を自立した過程ととらえる複合革命論を採り，ボリシェヴィキの政策にもラディカルな分析を加えるなど，いっそう踏み込んだ議論を展開している。こうした方向での今後の議論の進展が注目される(注3)。しかし本書に対してこうした問題点をことさらに強調するのは正当ではない。なぜならば，本書においてもたとえば，貧農委員会や食糧徴発隊がしばしば農民の敵対を招いたこと，貧農の多くが貧農委員会の提起を受け入れる心理的基礎を欠いていたこと，機械トラクター・ステーション政治部の活動が非常措置の常態化に影響を及ぼしたことなどがすでに指摘されているからである。

IV

本書で，今日命令・行政システムや兵営社会主義と呼ばれている体制が1930年代に農村で確立する過程を問題にし，そのいくつかの側面に解釈を与えていることは重要である。それは，スターリン主義の根源は何かという問題を解明することでもある。本書が出された1988年を前後する時期，こうした問題はソ連の論壇の中心的な論争テーマの1つであった。既存のシステムの克服を目指しているソ連において，そのシステムの根源を明らかにすることはきわめて実践的な意味を持つ問題であり，さまざまな解釈が対立している。本書はこの問題を農村における社会主義建設の歪曲と捉え，その要因と影響の分析にとりくみ，具体的な歴史研究による裏づけを示そうとしている。今日のソ連では論拠を抜きにして先走る議論がきわめて多いという状況のなかで，本書の価値として，この点がまず評価されなければならない。

社会主義建設を歪めた要因としてコズローフはまず，非常措置症候群（чрезвычайщина）を挙げる。それは，1920年代末の農業政策の弱点と穀物調達危機を，非常措置の導入とその常態化によって克服し，穀物調達と農村の集団化を行政的，暴力的手段によって加速しようとする路線である。次に，農民がコルホーズを受け入れる物質的・精神的土台を欠いている段階で全面的集団化が加速されたという状況があったことを指摘している。具体的には，農民が私的所有者としての個人主義と伝統的諸概念を引きずっている段階で集団化が追求されたため，集団化への激しい抵抗が生じただけでなく，エゴイズムや悪平等がコルホーズの中にも持ち込まれ，それは独特の形態をとって現われた。コルホーズの労働組織には，生産と分配における個人と集団と全体（国家）の利害を調整するメカニズムを欠いていた。このことは一般の農民だけの問題でない。コルホーズの組織者にとってもコルホーズの労働組織の具体策は不明確で，暗中模索であった。こうした深刻な問題を抱えながら，農村の活動家

の「逸脱の心理」，すなわち社会主義的生産関係を一挙に確立しようとする熱狂がはたらき，全面的集団化の過程は加速された。こうして土地と労働からの農民の疎外とコルホーズの国家化が確立してゆく。

以上の議論を多少単純化してまとめると，コズローフにとって兵営社会主義を生んだ基礎は，まずスターリンを頂点とする党指導部のレーニン主義の原則からの逸脱と非常措置症候群であり，さらにそれを支えたのが農村活動家の心性と，革命前から受け継いできた農民の精神的遺産だということになろう。こうした議論自体は決して新しいものではないし，コズローフ自身すでに展開している議論でもある(注4)。したがって，ここで注目すべきは，問題設定よりもむしろ，そこで分析されている具体的事実である。

V

ペレストロイカは，社会の変化の点でも，論壇での議論の点でも急速に進展し，ソ連の政治を変えている。したがって，1年前にラディカルであった議論が，今やあたりまえのものになったり，古くなったりすることは容易にありうる。党大会が「人間的・民主主義的社会主義」を掲げ，社会主義がより広い文脈のなかで根本から問い直され，「レーニン主義の原則」そのものが問題になっている今日，議論の焦点はすでに，「原則」からの逸脱と歪曲を問題とする本書よりも先に進んでいる(注5)。農民の心理や文化を問題にするにしても，専制時代の負の遺産よりも，農民の経営者としての意識といった文化的側面が革命によって失われたという点が，問題になっている。とはいえ本書は，こうした状況変化によっても価値を失わない豊富な内容を含んだ研究である。

（注1） こうした点にかんしては，たとえば，塩川伸明「現代ソ連の思想状況——ネオ西欧派とネオ・スラヴ派——」（『ソ連研究』第9号 1989年10月）／Davies, R. W., *Soviet History in the Gorbachev Revolution*, ロンドン，Macmillan, 1989年（邦訳『ペレストロイカと歴史像の転換』岩波書店 1990年）／Поляков, Ю. А.〔ポリャコーフ〕, "Исторический процессм ногомерен"〔歴史的過程は多元的である〕, *Страницы истории Советского общества*〔ソヴィエト社会史のページ〕, モスクワ, Издательство политической литературы, 1989年などを参照。

（注2） アメリカの社会史にかんしては，内田健二「スターリン批判と歴史学の動向——スターリン体制の社会的基盤をめぐって——」（『ソビエト研究』第2号 1989年8月）を参照。

（注3） Кабанов, В. В.〔カバーノフ〕, "Аграрная революция в России"〔ロシアにおける農業革命〕, *Вопросы истории*〔歴史の諸問題〕, 第11号, 1989年。

（注4） たとえば，"Время трудных вопросов——История 20-30-х годов и современная общественная мысль"〔難しい問題の時代——20～30年代の歴史と現代の社会思想〕, *Правда*〔プラウダ〕, 1988年9月30日，10月3日を参照。

（注5） たとえば，"Современное видение социализма"〔現代の社会主義イメージ〕, *Правда*, 1990年1月21，22日。

（東京大学大学院）